

# 伝記と口説

——漢代春秋学への一視点——

内山直樹

## はじめに

「伝記」という言葉は、漢代には主として、経書を解釈し、あるいは補足する書物を指した。このことは「伝」と「記」とそれぞれの意味からも想像されるが、この言葉はさらに、劉向・劉歆父子の周辺において、あるいは春秋学の文脈において、それ以上の含みをもつて用いられることがあった。今、先行研究に依拠しつつ、この言葉の用例を通して、両漢の際における春秋学、ひいては学術観あるいは著述観の一側面を垣間見たい。

## 一

まず、「伝記」が経書の解釈ないし補足であったという点について確認しておきたい。もっともわかりやすいのは『漢書』楚元王附劉歆伝における次の用例である。

河平中、受詔与父向領校秘書、講六芸・伝記・諸子・詩賦・数術・方技、無所不究。(河平年間に詔を受けて父の向とともに中秘の蔵書の校定を統括し、六芸・伝記・諸子・詩賦・数術・方技を研究し、きわめないものはなかった。)

今これを『七略』の「有輯略、有六芸略、有諸子略、有詩賦略、有兵書略、有数術略、有方技略」(『漢書』芸文志序)という構成と比較してみると、劉歆伝では「兵書」を欠き、「六芸」の後に「伝記」を加えている。

「兵書」を欠くのは、この分野のみは漢初の張良・韓信より、武帝期の楊僕をへて、成帝期の任宏にいたるまで、独自の整理が進められ、劉向・劉歆の関与の度合が特に低かったためであるが、一方の「六芸」の後に「伝記」を加えていることについて、余嘉錫は、それは『漢書』芸文志序の上文に「劉向校經伝・諸子・詩賦」と、やはり「六芸」

のみ「経伝」に言い換えているのと同様で、六芸略が五經に加え「伝記」をも収めることを明示するものだとしている。<sup>③</sup>

その直前で余嘉錫が「『論語』『孝経』はいずれも漢代には「伝記」と呼ばれた」と述べているのによれば、ここでの余嘉錫の主眼は、六芸略に論語・孝経・小学の三家が附される理由を説明することにあるようだが、とはいえもちろん「伝記」が「論語」や「孝経」ばかりに限られるわけではなく、それは六芸略に著録される類の、易・書・詩・春秋の各種の「伝」や礼・楽の「記」などを含めた総称であるにちがいない。『漢書』元后伝に引く王鳳の上疏に「五經、伝、師所誦説」とあり、また王莽伝下に引く天鳳元年六月の詔に「考之経、芸、合之伝、記」とあるのも、同様の意味であろう。<sup>④</sup>

「伝記」という言葉の出現した経緯について、戸川芳郎氏は、上引の劉歆伝および元后伝の用例を挙げつつ、次のように述べる。

どうもこの伝説・伝記ということば、自体は、前漢後期まさに、経学昌明時代（皮錫瑞）に、各種の「伝・記・説」の盛行のもとに熟したものの、と思われる。『史記』儒林伝には、かかる語はもとより「経伝」の語すら見

当たらず、…『漢書』儒林伝にも「伝記・伝説」の表現がないのがかえって特徴なのである。<sup>⑤</sup>

ここで戸川氏が「伝説」という言葉をも併せ挙げるのは、『漢書』劉歆伝に引く劉歆「移書議太常博士」に見える、次のくだりを念頭に置いていることである。

至孝文皇帝、…天下衆書、往往頗出、皆諸子伝説、猶広立於学官、為置博士。<sup>⑥</sup>（文帝の世に至り、…各地から多くの書物があらわれ、いずれも諸子伝説の類であったが、なおも広く学官を立て、博士を置いた。）

この「諸子伝説」が、後漢の趙岐「孟子題辭」では「伝記」と言い換えられている。

孝文皇帝欲広遊学之路、論語・孝経・孟子・爾雅、皆置博士。後罷伝記博士、独立五経而已。（文帝は学問に進む道を広げようとして、『論語』『孝経』『孟子』『爾雅』のいずれも博士を置いた。その後、伝記博士を廃し、ただ五経のみを立てた。）

これによれば、その内訳は『論語』『孝経』『孟子』『爾雅』ということになるが、いずれにせよ、この所伝は『史記』に記載のないものであり、「諸子伝説」なり「伝記」なりの博士が文帝期に置かれていたかどうか、仮に置かれていたとしてそのような名称であったかどうかは、定かでない。<sup>⑦</sup>

なお、『漢書』河間獻王伝には次のように「経伝説記」という言葉が見える。

献王所得書、皆古文先秦旧書、周官・尚書・礼・礼記・孟子・老子之属、皆経伝説記、七十子之徒所論。(献王の手に入れた書物はいずれも古文字で書かれた先秦の旧書であり、『周官』『尚書』『礼』『礼記』『孟子』『老子』など、いずれも経伝説記の類、七十子の整理に係るものである。)

ただし、この話も『史記』五宗世家には見えない。<sup>(8)</sup>

『史記』中に用例を探れば、三代世表の、ただし司馬遷の本文ではなく、宣帝五鳳年間から元帝期の頃(前五七―前三三)に続撰されたと推定される褚少孫の補論部分に、次のように見える。

張夫子問褚先生曰、詩言契・后稷皆無父而生。今案諸伝記咸言有父、父皆黃帝子也。得無与詩謬乎。(張夫子が褚先生に尋ねた、『詩』には契と后稷は父なくして生まれたとあるが、今伝記に照らすに、いずれも父はいたといい、その父はともに黃帝の子であるという。『詩』と食い違いはしまいか)

ここでの「伝記」は、文脈からすれば、まずは『史記』三代世表自体を指すと見るのが妥当であろう。すなわち三代

世表の本文に「黃帝生玄囂」「玄囂生蟠極」「蟠極生高辛」、さらに「高辛生禹」<sup>(10)</sup>「高辛生后稷」とあり、つまりは黃帝の曾孫たる高辛が禹と后稷を生んだとしているのを承けて、それが『詩』の詠ずるところと齟齬すると評しているわけである。<sup>(11)</sup> 下文において褚少孫が「以三代世伝言之、后稷有父名高辛」云々と、三代世表を「三代世伝」と呼んでいることも、それが上文の「伝記」の言い換えであることを示唆しよう。

そもそも褚少孫は、『史記』すなわち「太史公」をも「太史公伝」と呼んでいたと思しき痕跡がある。<sup>(12)</sup> また漢代にはこの書を「太史公記」と称した例も散見する。<sup>(13)</sup> このことを指摘した戸川氏は、さらに「太史公」が経書の解きあかしとしての伝・記の位置におかれていたということ<sup>(14)</sup>に注意を促している。『史記』というと、一見これまで述べてきた経解の類とはまったく性質を異にするように思うが、必ずしもそうではない。

上引の問いに対する答えのなかで、褚少孫は「詩伝曰、湯之先為契、無父而生」云々と、「詩伝」を引いて反論している。これは現行の毛伝とは相反する説であり、<sup>(15)</sup> 褚少孫と問者の張長安とがともに業としていた魯詩系統のものである<sup>(16)</sup>が、ともあれここで「伝記」は、「詩伝」に対抗して、

『詩』の経義解釈に資するものとして用いられているのである。

さらに考えを進めると、上引文中の「伝記」がひとり『史記』のみを指すかどうかは確定的ではない。たとえば今『大戴礼記』に収める「帝繫」にも、黃帝の曾孫を帝嚳高辛氏とし、帝嚳と上妃姜嫄との子を后稷、次妃簡狄との子を契とする記載がある。三代世表序において司馬遷は、作表のよりどころとした文献の一つに「五帝繫謬」なるものを挙げているが、索隠にいうとおり、それは『大戴礼記』中の「五帝徳」およびこの「帝繫」の二篇に相当するものと考えられる。いうところの「伝記」とはこれらの文献を包括した呼称である可能性もある。「今案諸伝記咸言有父」の「諸」字が「もろもろの」という意味であるとすれば、なおさらである。<sup>18)</sup>

もっとも、褚少孫の『史記』に対する評価は一律というわけではない。滑稽列伝の補論では「臣幸得以経術為郎、而好読外家伝語」といって、『史記』を「外家伝語」と看做している。これも「経術」に対比され、やはり「伝」の文字を含むのでややこしいが、「外家」という以上、むしろ「経術」の中心からは外れた書をいうのであろう。<sup>19)</sup>

再び戸川氏の論を参照すれば、『史記』が「伝」「記」の

位置を獲得するのは前漢も押し詰まった時期になってからのことであって、本来『太史公』とは、個人の尊号を冠したその書名が示すように、諸子の類に属すべき一家言の書であった。<sup>20)</sup>褚少孫の『史記』に対する評価の揺れは、そのような『史記』の位置の揺れを反映したものと思われる。

「伝記」という言葉の用例はこれをもって嚆矢とするようだが、であれば、この言葉はやはり、前漢末葉における経義解釈学の盛行にともなつて生み出されたものとはいえる。最後に挙げた例のように、『史記』のような著作を指すと思われる場合でさえ、それを経学的に扱う際に用いられているのである。ただし、それが単純に「伝」や「記」の総称にすぎないのかといえそうとは限らず、より特殊な意味合いで用いられる場合もある。次節で検討したい。

## 二

もし「伝記」が、経解の称としての「伝」と「記」を併せた呼称にすぎないのであれば、「伝記」という言葉の用例に拘泥するのはあまり意味のないことにも思われよう。しかし、劉歆による次の用例には、それ以上の含みが認められる。

前節にも言及した劉歆「移書讓太常博士」は、『古文尚



書『逸礼』『左氏春秋』の学官への建立を肯んじない当時の五経博士らへの指弾を、次のような厳しい言葉で綴っている。<sup>21)</sup>

往者綴学之士、不思廃絶之闕、苟因陋就寡、分文析字、煩言碎辞、学者罷老且不能究其一芸。信口説而背伝記、是末師而非往古、至於国家将有大事、若立辟雍・封禪・巡狩之儀、則幽冥而莫知其原。猶欲保殘守缺、挾恐見破之私意、而無從善服義之公心、或懷妬嫉、不考情実、雷同相從、隨声是非、抑此三学、以尚書爲備、謂左氏爲不伝春秋、豈不哀哉。(これまで学問の伝授に携わってきた者たちは、断絶による欠落に思いを致さず、かりそめに陋見に依拠して眼前の残りものに執着し、その文字を剖析し、言辞を粉碎し、老いさらばえるまで学んでも一経すら究めることができない始末。口授の教説を信用して伝記に違背し、後世の師儒を尊重して古代を否定し、ひとたび国家が大事に臨み、辟雍・封禪・巡狩の儀を定めるような段に至るや、茫然としてその沿革を答えることもできない。それでもなお残骸を守ろうとし、負けまいとする私意を懷くのみで、善に服す公心はない。嫉妬に囚われ、事実を察せず、ただ人の後について批評しては、この三つの学問を抑

圧し、『尚書』は完備しているとか、左氏は『春秋』の伝ではないとかいう。哀れなことではないか。)

ここにいう「伝記」とは、劉歆のいう「三学」が『古文尚書』『逸礼』『左氏春秋』の三者である以上、経である前者ではなく、もっぱら『左氏春秋』を指すにちがいない。ゆえに、「往古」の「伝記」を棄てて「末師」の「口説」に就くとの非難も、主として公羊・穀梁両派の師儒に向けたものと理解される。それは、やはり劉歆の説にもとづくとされる『漢書』芸文志六芸略春秋家小序の「及末世、口説流行、故有公羊・穀梁・鄒・夾之伝」という一文によっても肯われよう。<sup>22)</sup>つまり、劉歆はここで、「伝記」の語を用いて公・穀に対する左氏の優位性を示そうとしているのである。

実際には、上引文末に引く「謂左氏爲不伝春秋」との今文側からの批判が端なくも示しているとおり、『春秋』の「伝」といえば公・穀の二家であり、左氏はその位置になりとするのが、むしろ当時一般の見方であった。劉歆はそれを敢えて転倒させ、むしろ左氏こそが「伝記」であると主張する。

この主張の背景には、「及劉歆治左氏、引伝文以解経、転相發明、由是章句義理備焉」(『漢書』劉歆伝)といわれ

るように、劉歆自身が『左氏春秋』を「伝」として経義の解釈に利用したという事情が存しよう。しかし同時に、それが「口説」と対比されていることからすれば、「伝記」とはまずもって、文字によって遺されたという『左氏春秋』自体の性質に、その優位性の根拠を置こうとするものであると思われる。「移書議太常博士」の上文にも、

及春秋左氏丘明所修、皆古文旧書、多者二十余通、臧於秘府、伏而未發。(および『春秋』の左丘明の撰述に係るものは、いずれも古文字で書かれた旧書であつて、二十数篇の多きに上り、秘府に蔵されたまま開かれることがなかった。)

と、それが古くに成つた文献であつて、ほとんど人目に触れず秘府に眠っていたことが述べられている。<sup>(23)</sup>

『左氏春秋』成立の事情については、『史記』十二諸侯年表序に次のような説明が見える。

七十子之徒口受其伝指、為有所刺譏褒諱挹損之文辭、不可以書見也。魯君子左丘明懼弟子人人異端、各安其意、失其真、故因孔子史記具論其語、成左氏春秋。(七十人の高弟らはその解説を口伝えに受けた。時政への毀譽褒貶が含まれるため、書いて示すわけにはいかなかったからである。魯の君子の左丘明は、弟子たちが

ひとりひとり考えを異にし、それぞれ自分の見解に安住して、本来の趣旨を見失うことを懼れた。そこで孔子の用いた記録に依拠し、その言葉をつぶさに集め、『左氏春秋』を完成させた。)

上にも引用した『漢書』芸文志六芸略春秋家小序では、同様の所伝を次のように敷衍している。

有所褒諱貶損、不可書見、口授弟子、弟子退而異言。丘明恐弟子各安其意、以失其真、故論本事而作伝、明夫子不以空言説経也。春秋所貶損大人、当世君臣、有威權勢力、其事實皆形於伝、是以隱其書而不宣、所以免時難也。及末世、口説流行、故有公羊・穀梁・鄒・夾之伝。(毀譽褒貶を含む点については、書いて示すわけにいかず、口頭で弟子たちに授けたが、弟子たちは退くと言を異にした。左丘明は弟子たちがそれぞれ自分の見解に安住して、本来の趣旨を見失うことを恐れ、そこで本づくところの事実を編集して伝を作り、孔子が空理空論によつて経を解説したわけではないことを明らかにした。『春秋』の譏刺する貴人は当時の權勢ある君臣であり、その事実はすべて伝に明示されていたので、その書を隠して世に示さず、そうすることで時諱に触れるのを避けたのである。後世になつて

口説が流行し、そこで公羊・穀梁・鄒・夾氏の伝があらわれた。）

両者の間にはかなりの異同が見られるが、今注目したいのは、後者において、左氏の書が完成後に秘匿され、そのため時諱に触れることを避け得たとされている点、またことさらに公羊・穀梁等の「口説」との対比が強調されている点である。

上引の文脈において「口説」とは、孔子から口頭で弟子に授けられたものが、文字に定着することなく、口伝によって受け継がれたことを意味すると思われる。実際、『公羊伝』に関し、それが久しく口授によって伝承され、漢代に入っではじめて文字に著されたとする所伝が存在する。

後漢の戴宏『解疑論』序に、『公羊伝』の授受について次のようにいう。<sup>(25)</sup>

子夏伝与公羊高、高伝与其子平、平伝与其子地、地伝与其子敢、敢伝与其子寿。至漢景帝時、寿乃其弟子齊人胡毋子都、著於竹帛、与董仲舒、皆見於図讖。（子夏は公羊高に伝え、公羊高は子の平に伝え、平は子の地に伝え、地は子の敢に伝え、敢は子の寿に伝えた。

漢の景帝の時代になって、寿はその弟子である齊人の胡毋子都とともに竹帛に著し、董仲舒に与えた。いず

れも図讖に見える。）

この師承は図讖に見えるとされるが、『史記』儒林列伝・『漢書』儒林伝ともに、胡毋生・董仲舒以前については記載がない。劉歆のいう「末師」とはおそらく戦国時代のことであろうから、ここまで引き延ばされた口伝の系譜は想定してまいが、根柢に口承性への認識がある点は同じである。<sup>(27)</sup>さらに興味深いのは、公羊家の側では、このような文字化の遅れを不利なものとは考えず、むしろ強味と捉えてさえいる点である。戴宏『解疑論』にやや遅れて『春秋公羊経伝解詁』を著した何休は、隠公二年伝「紀子伯者何、無聞焉爾」条の注に次のようにいう。

言無聞者、春秋有改周受命之制、孔子畏時遠害、又知秦将燔詩書、其説口授相伝、至漢公羊氏及弟子胡毋生等、乃始記於竹帛、故有所失也。（「無聞」というのは、『春秋』には周の受命の制を改める意が寓されているので、孔子は時局に配慮し、また秦の焚書を予知し、その説を口授によって伝え、漢になって公羊氏とその弟子の胡毋生らが始めて竹帛に記した。そのため遺失があるのである。）

すでに見たように、『史記』十二諸侯年表序や『漢書』芸文志六芸略春秋家小序にも、孔子が時諱に触れるのを恐れ、

『春秋』の解説を口頭で弟子に授けたとする、いわゆる孔子説経説話ないし口授説話が説かれていたが、<sup>(29)</sup>ここではそれをさらに敷衍して、秦の焚書を予見したがゆえに、漢代に至るまで敢えて竹帛に著されなかったとして、その口承性がかえって優位性の根拠とされている。

また哀公十四年伝「莫近諸春秋」条の注にいう。

得麟之后、天下血書魯端門曰、趙作法、孔聖沒、周姬亡、彗東出、秦政起、胡破術、書記散、孔不絶。子夏明日往視之、血書飛為赤鳥、化為白書、署曰演孔図。(獲麟の後、天は魯の端門に血書を下した。その文に「速やかに法を作れ。孔子は没し、周は滅び、彗星が東にあらわれ、秦王政が立ち、胡亥が先王の術を破壊し、書物は散ずるが、孔子の道は絶えぬ」とあった。子夏が翌日見に行くと、血書は飛び立って赤鳥となり、文字は白く変わって、「演孔図」と署名されていた。)

ここでも「書記散、孔不絶」とは、焚書にもかかわらず孔子の道が継承されることをいうらしく、それは口伝によればこそであろう。<sup>(30)</sup>

かくして、書かれたものとしての「伝記」と、語られたものとしての「口説」は、二途に分かれてそれぞれ優位性を主張し合うわけであるが、しかしあらためて考えてみれ

ば、そもそも「伝」という言葉には師資相伝の語感がともなうものではないか。たとえば『易』について、『漢書』芸文志六芸略易家小序に「及秦燔書、而易為筮卜之事、伝者不絶、漢興、田何伝之」とあり、同儒林伝に田何が王同・周王孫・丁寛・服生に授けたことを述べた後に「皆著易伝数篇」とあるのは、焚書を生き延びた理由こそ異なれ、要は「口授相伝」と同じで、一定の伝授の過程を経た後、漢代に至り「易伝」の著述に結実したということであろう。とすれば、完成後ただちに「隠其書而不宣」との措置を受け、漢代になっても「臧於秘府、伏而未発」という、まさに伝を絶った状態にあった『左氏春秋』は、「伝」の名に値しない。それも「左氏不伝春秋」とされた一因ではなかったか。

つまり劉歆は、「伝記」という言葉を用い、そこに書かれたものという含みを忍び込ませることによって、「伝」の地位の奪取を図ったといえよう。その際に動員されたのが、「記」の文字の否応なく喚起する記録という含意、より端的には、史官の記録としての「史記」への連想ではなかったか。実は前に引いた『漢書』芸文志春秋家小序の上文には「(仲尼) 故与左丘明觀其史記、拋行事」云々、すなわち孔子が左丘明とともに魯の史官の記録を見たという

くだりがある<sup>(31)</sup>。左氏の「伝記」とは直接「史記」に由来するものなのである<sup>(32)</sup>。実際、ここで「史記」の記録対象とされる「行事」は、また「伝記」の内容ともされる。次節でさらに検討を加えたい。

### 三

前節に引いた劉歆「移書讓太常博士」と『漢書』芸文志六芸略春秋家小序とを併せて考えると、そこに互いに重なり合う二組の対立概念が浮かび上がってくる。一組は前節に論じた「伝記」と「口説」であり、もう一組は「本事」と「空言」である。「本事」はまた「行事」「事実」とも呼ばれているが、要するに「事」である。そして「故論本事而作伝、明夫子不以空言說経也」（春秋家小序）との一文が示唆するように、「伝記」は「本事」を集めたもの、「口説」は「空言」を談じたものとされる。

「事」に関しては、すでに戸川氏も論じ、さらにそれを承けて岩本憲司氏が詳密な議論を展開しているので<sup>(33)</sup>、贅言するには及ばないが、単純化していえば、それは「義」を説くことに主眼を置く公羊・穀梁系の春秋学に対し、左氏の特長として、劉向・劉歆父子らによって「発見<sup>(34)</sup>」されたものであり、経の本づくところの史実を論定するという、

別種の春秋学のあり方を提示することになった<sup>(35)</sup>。

そのような「事」の春秋学の陣営を補強するために、劉氏父子は、それまで春秋学に関わることは看做されていなかった書物をも、春秋学の枠内に取り込んでいったらしく、その経緯は劉向の群書叙録や劉歆の『七略』に窺うことができる。『七略』を踏襲した『漢書』芸文志の六芸略春秋家には二十九種の文献が著録されているが、後半の「国語二十一篇」以下十一種は、概ねそのようにして取り込まれたものである<sup>(36)</sup>。

なかでも顕著な例として、戸川氏や岩本氏も言及する「戦国策三十三篇」がある。この書は劉向が中秘に蔵されていた零細な資料を整理して成ったもので、書名も劉向が定めた。「戦国策書録」に次のようにある。

中書本号、或曰国策、或曰国事、或曰短長、或曰事語、或曰長書、或曰修書。臣向以為、戦国時游士輔所用之国、為之策謀、宜為戦国策。其事継春秋以後迄楚漢之起、二百五十四年間之事。（中秘本の名称は「国策」「国事」「短長」「事語」「長書」「修書」などさまざまだが、私劉向が思うに、戦国時代の遊説の士が、登用された国を輔佐し、策謀をめぐらしたものであるから、「戦国策」とするのが適切であろう。その史実は『春秋』

の後、楚漢期の前までの、二百五十四年間の史実である。）

つまり、内容上は「游士」の「策謀」であり、諸子略從横家に属すべきものを、一時代の「事」の記録としてその性格を読み替えることで、春秋家に取り込んだのである。この種のものが「伝記」の隊伍を充たしていったわけで、「太史公百三十篇」もその一つなのである。

ここに至り、「伝記」という言葉の今一つの用例を検討することが可能となる。『漢書』劉向伝に次のようにある。

故採取詩書所載賢妃貞婦、興國顕家可法則、及孽嬖乱亡者、序次為列女伝、凡八篇、以戒天子。及采伝記行事、著新序・説苑、凡五十篇、奏之。（『詩』『書』に載る賢妃や貞婦の、国や家に繁栄をもたらし、手本となる者、および嬖妾の混乱や滅亡を招いた者を取り上げ、編集して『列女伝』八篇にまとめ、天子の鑑戒とした。また伝記に載る史実を採集して『新序』『説苑』計五十篇を著し、奏上した。）

劉向による『列女伝』『新序』『説苑』の撰集について述べたくのだが、ここで『列女伝』が『詩』『書』に材を得たとされるのは、現行の『列女伝』にも認められる、ほぼ条ごとに『詩』を引き、また時には『書』を引くという体

例を髣髴させよう。それに対し『新序』『説苑』は「伝記」の「行事」を採ったとされる。この「伝記」は、単に経義解釈の書という意味ではないし、さりとて漠然と書物全般を指すわけでもない。それはまさしく「行事」（往行の成事<sup>37</sup>）を記載したものであるの『左氏春秋』、およびそれに列なるものとして春秋家に取り込まれることになる諸書を指すはずである。

実際には、『新序』『説苑』に収められる説話群の出典がそのような偏りを示すことはなく、広く群書に及んでいる。『春秋』三伝について見ても、左氏が多数を占めるとはいえ、公・穀も少なくはない。<sup>38</sup> ゆえに如上の見方は必ずしも事実に沿うものではない。しかし、おそらくは劉歆かと疑われる、上引の一文をものした人物の脳裏においては、『新序』『説苑』は「行事」を記した左氏系の書物であつたし、そうでなければならなかつた。そこにはあたかも、同じく劉向の手で整理された『戦国策』の場合と、同様の事情がはたらいていたのである。<sup>39</sup>

## おわりに

以上のように、前漢末期にあらわれた「伝記」という言葉は、一般的な意味では経解の類の総称であつたが、同時



に、この時期の春秋学における左氏顕彰の動きのなかで、「口説」ならぬ書かれたもの、また「空言」ならぬ事実を記したものであるという特別な価値をも負わされた概念であった。とりわけ「伝記」と「口説」との対立は、ひとり春秋学の問題にとどまらず、たとえば王充のいわゆる「世儒」と「文儒」の対比にも見られるような<sup>(40)</sup>、後漢にかけての學術観ないし著述観の変化へと連なるものと思われるが、その詳細な考察については後日を俟ちたい。

## 注

- (1) 一般的な観点からは呂思勉「伝・説・記」(『呂思勉讀史札記』、上海古籍出版社、一九八二、所収)等が有益だが、小論の関心よりすれば、とりわけ戸川芳郎「芸文志―偶談の余」(3)「『漢文教室』一〇八、一九七三」に多くを負っている。
- (2) 拙稿「『七略』の体系性をめぐる一考察」(『千葉大学人文研究』三九、二〇一〇)、三四―四〇頁。
- (3) 余嘉錫『目錄學發微』(中華書局、一九六三)、一三二頁。
- (4) 『漢書』と近い時期に書かれた王充『論衡』量知篇にも「載竹為簡、敝以為牒、加筆墨之跡、乃成文字、大者為經、小者為伝記」と、經と「伝記」を対比させた例がある。
- (5) 戸川上掲論文 二八頁。
- (6) なお、『漢書』芸文志序には武帝期のこととして「於是建蔵

書之策、置書写之官、下及諸子伝説、皆充秘府」とある。

- (7) 王国維は、『論語』『孝経』『孟子』『爾雅』の博士は同時に廃止されたがその理由は単一ではなく、『孟子』は諸子であるために廃止され、『論語』『孝経』は誰もが誦習すべき書であつて博士に制限すべきではないので廃止されたとする(『漢魏博士考』、『觀堂集林』卷四)。その意を忖度するに、『諸子伝説』の「諸子」は『孟子』を、「伝説」は他の三書を指すと考えているのではないか。ただし、王氏は「移書太常博士」を引いて「諸子伝説」を「諸子伝記」としている。

- (8) 上引の戸川氏の言にもあつたように、「伝」「説」「記」の三者が前漢期の経義解釈の代表的なものである。呂思勉注(1)所掲論文を参照。

なお、武帝期以前のことで、『漢書』に見えて『史記』に見えない用例を今一つ挙げれば、『漢書』東方朔伝の、館陶公主が十三歳の董偃を侍童として抱えるくだりに、「因留第中、教書計相馬御射、頗説伝記」とある。この「伝記」は『孝経』『論語』を指すと思われる。

- (9) 拙稿「褚少孫の『史記』補続」(『中国文化―研究と教育』六一、二〇〇三)を参照。
- (10) 「虞」は「契」の本字。『説文』卷十四上「内」部に見える。
- (11) 『詩』は商頌・玄鳥および大雅・生民を指す。なお、上引文中に「父皆黄帝子」とあるが、実際は黄帝の曾孫である。索隠に「此云黄帝子者、謂黄帝之子孫耳」という。
- (12) 龜策列伝に「窃好太史公伝」とあるのがそうである。ただし、

その直後につづく「太史公之伝曰」云々は、明らかに太史公自序からの引用であり、ゆえに「太史公伝」も太史公自序のみを指す呼称である可能性もある。今後者をもって『史記』全体を指すとするのは、戸川氏の説によった（戸川芳郎「史記の名称―偶談の余（2）」、『漢文教室』一〇六、一九七三、二四―二五頁）。

(13) 『漢書』揚惲伝、『論衡』道虚篇、また『風俗通』にも散見する。前注所掲戸川論文、二二―二四頁を参照。

(14) 同上、二五頁。

(15) 毛伝は契を高辛氏と簡狄の子、后稷を高辛氏と姜嫄の子とする。ちなみに鄭箋はそれと異なり感生帝説を取る。

(16) 「張夫子」が『漢書』儒林王式伝に褚少孫の兄弟子としてその名の見える張長安であることは、『史記会注考証』に指摘がある。同伝に「由是魯詩有張・唐・褚氏之学」とある張氏と褚氏はこの二人のことである。

(17) 『史記』三代世表「於是以五帝繫譜・尚書集世、紀黃帝以來訖共和為世表」、索隱「案大戴礼有五帝德及帝繫篇、蓋太史公取此二篇之譜及尚書、集而紀黃帝以來為系表也」。なお、『史記』殷本紀および周本紀はかえって「無父而生」の立場を取る。(18) ただし、「諸」字を「之於」の意とする解釈もまた可能である。

(19) 索隱は「非正經、即史伝雜說之書」とする。滑稽列伝補論の下文にも「武帝時、齊人有東方生名朔、以好古伝書、愛經術、多所博觀外家之語」と、類似的表現が見える。なお、注

(9) 所掲拙稿を参照。

(20) 戸川注（12）所掲論文、二二頁。

(21) 『漢書』劉歆伝の上文では「欲建立左氏春秋及毛詩・逸礼・古文尚書皆列於学官」と『毛詩』をも加えているが、「移書讓太常博士」の文中では『詩』についても論じられているものの『毛詩』への言及はない。

(22) 『漢書』芸文志各略の総序や各類の小序は『七略』輯略に由来すると考えられる。姚振宗「七略佚文」（『師石山房叢書』、開明書店、一九三六、所収）序を参照。

(23) 『漢書』儒林伝には、張蒼・賈誼以下、漢初以来「春秋左氏伝」を伝えた者の名を挙げているが、ここでの劉歆の認識とは一致しない。

(24) たとえば戸川氏は後者に認められる「事」の強調に注意を促している（注（1）所掲論文、二六―二七頁）。この点については次節に取り上げる。

(25) 『春秋公羊伝注疏』何休序「伝春秋者不」句下の徐彦疏に引く。戴宏については、『後漢書』呉祐伝、およびその李賢注に引く『濟北先賢伝』に、零細ながら言及がある。字は元襄、濟北郡剛県の人で、儒宗として東方に名を馳せ、官は酒泉太守に至ったという。順帝・桓帝の頃（二二六―一六七）の人であろう。なお、その著『懷疑論』については、吉川幸次郎「戴宏懷疑論考」（『東方学報 京都』二、一九三二、『吉川幸次郎全集』六、筑摩書房、一九六八、所収）に輯佚と考証がある。(26) 文字の誤脱があると思われる。吉川上掲論文は「其」を

「其」に作り、唐晏『兩漢三國學案』は「其」を「与」に作る。

(27) 『漢書』劉歆伝に「歆以為左丘明好惡与聖人同、親見夫子、而公羊穀梁在七十子後、伝聞之与親見之、其詳略不同」というのによれば、単に「末師」とは七十子より後、「口説」とは再伝三伝を経たという程度の認識であつたかもしれない。

(28) 『公羊伝』何序「恨先師觀聽不決」徐疏に「此先師、戴宏等也」という。

(29) 孔子説經説話については、岩本憲司「春秋学における『孔子説經』説話について」(『東方学』六五、一九八三)を参照。

(30) 徐疏に「演孔図文也。…当爾之時、書契紀綱尽皆散乱、唯有孔子春秋、口相伝者、独存而不絶」という。

(31) 上引のごとく『史記』十二諸侯年表序にも左丘明が孔子の見た「史記」によつて『左氏春秋』を作つたとあるが、孔子とともに「史記」を見たとはいつていない。なお、前漢期の『嚴氏春秋』佚文に觀周篇を引いて「孔子将脩春秋、与左丘明乘如周、觀書於周史、帰而脩春秋之經、丘明為之伝、共為表裏」という(『春秋左氏伝正義』杜預序「左丘明受經於仲尼」正義に引く沈文阿の説に見える)。

(32) この「史記」はむしろ司馬遷の『史記』とは別物である。しかし第一節に見たように、『太史公書』もまた「伝記」と呼ばれていたことは、単なる偶然ではあるまい。『太史公書』のもつ事実の記録という一面のために、「伝記」の称がより符合すると考えられたのではないか。

(33) 戸川注(1)所掲論文、および岩本憲司「義から事へ」『左史伝』の出現(『渡邊義浩編『兩漢における詩と三伝』、汲古書院、二〇〇七)。

(34) 岩本氏の表現を借りた。同氏上掲論文を参照。

(35) 『漢書』劉歆伝には『左氏伝』に対する劉氏父子の態度について、「父子俱好古」としながらも、「歆数以難向、向不能非間也、然猶自持穀梁義」と、劉向が穀梁家の立場を守つたことを伝える。とすれば、劉向の左氏への愛好は、せいぜい二次的なものにとどまり、劉歆の過激さとは一線を画したと思われる。

(36) 注(2)所掲拙稿、三〇—三二頁を参照。

(37) 戸川注(1)所掲論文、二七頁。

(38) 『新序』は公羊寄り、『説苑』は穀梁寄りとされる。池田秀三「劉向の学問と思想」(『東方学報』京都『五〇、一九七八』)、野間文史「劉向春秋説攷」(『哲学』三一、広島哲学会、一九七九)、北村良和「劉向史学管見」(『東方学』六一、一九八二)等を参照。

(39) ただし、そうであれば『戦国策』と同様、『新序』『説苑』も春秋家に編入されてよさそうなものだが、『漢書』芸文志では諸子略儒家に「劉向所序六十七篇」の一部として著録されている。この問題については今後の検討を俟ちたい。

(40) 『論衡』書解篇。なお、著述家たる「文儒」を代表する人物のうちには司馬遷や劉向が含まれる。

(千葉大学)